

## 総説

## 看護系大学における短期海外研修の現状と課題

加藤 穰<sup>1§</sup>

## 要 旨

短期海外研修は多くの大学で行われている。本稿では看護系の短期海外研修に焦点を当てて現状・課題についてどのような知見が公表されているか文献を検討した。NII 学術情報ナビゲータ (CiNii) をデータベースとして論文検索を行った。検索結果を条件に従って絞りこみ、合計 63 件の文献を検討した。また、日本看護系大学協議会の各大学のウェブサイト内を検索して短期海外研修に関する情報を収集した。語学と専門分野の様々な組み合わせが見られた。文献の多くは研修内容の報告、自記式質問紙による調査であった。語学力に関して大部分は主観的な報告であった。文献で扱われたのはウェブ上での研修に関する情報を鑑みると一部に過ぎず、十分な報告があると言えない。国際的視野の獲得や語学学習の動機づけについて有効性は繰り返し示されているが多くの場合参加者の主観的な評価によっていた。また、語学を含めた準備が課題として指摘されていた。研修に関する情報の共有を進めることが看護系大学における短期海外研修の改善につながる可能性がある。

キーワード 海外研修, 短期研修, 国際看護, 外国語

## 1. はじめに

学生が短期間海外に滞在して学習する「短期海外研修」は多くの大学で行われており、本学（石川県立看護大学）を含む看護系大学も例外ではない。とりわけ近年においては、「グローバル人材」の育成が語られるようになり、学生に国際的な経験を積ませることをアピールポイントとする大学も多いようだ。医療系以外の学部ではおそらく海外でのビジネス展開を考える経済団体などの要請が背景にあると推測されるが、医療分野においてもその重要性が指摘されている。背景には、日本がすでに世界第4位（2018年時点）の移民大国となっており、国内に約250万人の在留外国人がいること<sup>1)</sup>、2012年まで年間1,000万人に届かなかった訪日外客数がその後急速に増加し、2018年には3,000万人を超えたこと<sup>2)</sup>、といった社会情勢、また、医療観光（メディカルツーリズム）を国際的なビジネスとして推進しようという政府の意向などがある<sup>3)</sup>。

ただ、海外での研修は語学研修にとどまらない意義がある。かのフローレンス・ナイチンゲールも1850年から1851年にかけて、それぞれ2週間と3週間の短期ドイツ留学によってキャリアを切り拓いたことが知られている<sup>4)</sup>。当時の医療分

野で最先端を走っていたドイツで最新の知見を学ぶ意義は大きかったに違いない。ここでみられるように、各国の最先端の試みを共有することで世界の医療は発達してきたという面がある。短期海外研修でも語学と専門分野がしばしば組み合わせられる。

本稿でとりわけ短期の海外研修を取り上げる理由であるが、看護師養成課程のカリキュラムがタイトなために、看護学専攻では長期の海外滞在が困難であり、実際に短期の海外研修が数多く実施されていることが挙げられる。看護学以外の分野でも短期の海外研修は数多く実施されている。日本人の若年層の「内向き志向」、留学離れも指摘されるが、これは正規留学の減少等のことであり、経済協力開発機構（OECD）等の統計を分析した研究によれば、日本人の海外留学者数はピーク時の2004年から大幅に減少したが、大学間交流協定等に基づく比較的短期の留学者数は増加傾向にある<sup>5)</sup>。ただし、短期研修の意義については議論がある。例えば総務省は「グローバル人材育成の推進に関する政策評価＜評価結果に基づく勧告＞」（平成29年7月14日）において、「日本の大学等に在籍した状態で留学する者の約8割は6か月未満（かつ約6割は1か月未満）の短期留学」であるが、その効果に対して懐疑的であり、6か月以上の留学経験が必要とする企業の認識に

<sup>1)</sup> 石川県立看護大学

<sup>§</sup> 責任著者

マッチしていない点も指摘する。そして、「短期留学、特に1か月未満のような極めて短期の留学が、グローバル人材の3要素の向上に対してどのような効果を持つのか、十分検証される必要」があるとしている<sup>6)</sup>。

ここで、論文の導入部分として異例ではあるが、本稿が看護学専攻のみを対象とすることについて、語学学習と国際的視野という点での特殊性について述べる。まず、看護学専攻の語学学習時間が少ない、という点である（ただし、国際看護学部というものがあるため、そうした専攻については事情が異なるであろう）。すなわち、看護系の専攻では英語を含む外国語の授業数は少ない。他の必修科目・専門科目の負担も大きいことから、語学に費やすことができる普段の学習時間も少ないと考えられる。それは語学に関して準備ができていない、ということであり、翻って、短時間の集中的な学習で効果を実感できる可能性がある、ということでもある。英語以外の言語が十分に授業として提供されているとも考えにくいので、短期海外研修の語学研修としての側面を考えると、英語以外の言語の最低限の日常会話レベルを超える習得は目標として考えにくい。次に、卒業後の就業と関連した特殊性を挙げる。看護学専攻の特殊性としては、卒業直後の外資系の雇用がほとんど考えられない、ということがある。一般の専攻では外資系のコンサルティングファーム、投資銀行、IT系企業、消費財メーカーは非常に人気が高い。内資系企業についても、例えば、よく知られたところでは楽天株式会社、UNIQLOのブランドで知られる株式会社ファーストリテイリング、株式会社資生堂などは英語を社内公用語としている。例えば楽天に入社する際には、800点が必要とされている<sup>7)</sup>。それ以外でも採用に際してTOEICスコアを参考にしている企業は多く、「7割の企業が採用時にTOEICスコアを」参考にしている<sup>8)</sup>。加えて、入社後の昇進の条件としてTOEICスコアを用いる企業もある。就職活動の仕方についても大きな違いがある。例えば事務系総合職では倍率が数百倍、あるいは千倍を超える企業もあり、看護師として就職する場合に志望した医療機関に多くの場合確実に採用される看護学専攻とは大きく事情が異なる。学生の側としては採用の確率を上げるために語学力向上やエントリーシートに書き込める活動・体験の蓄積が望まれる。看護学部ではそうしたことによって就職活動に有利になる、あるいはそのような活動がそも

そも就職に関連があるという意識があるとは考えにくく、語学力向上や海外研修参加の動機づけは必ずしも強くない。こうしたことから、本稿は特に看護学専攻のみを対象とする。

とりわけ看護系の短期海外研修の現状・意義・課題についてどのような知見が公表されているか、という問いに直接関係する先行研究としては、例えば、三原らは「短期海外研修を通じた国際交流」の「実践と成果」について文献レビューを行い、実践として【語学・異文化体験を目的とした短期海外研修】【専門的交流（保健福祉領域）を目的として短期海外研修】の2種類に分けられ、前者では「英語の授業」「ホームステイ」が行われ、後者では「保健福祉領域の学生との交流、病院、施設などの見学プログラム」が行われており、アンケート調査等により「言語能力・学習意欲の向上、異文化への理解と順応、滞在国へのイメージの改善などの効果」が示された、とした<sup>9)</sup>。しかし、2010年代の選択基準の明記されない文献11件の内容をまとめたにとどまっている（文献表13）。また、谷野（2015）<sup>10)</sup>（文献表22）は、海外研修の目的は「看護学生が国際的な視野を持つこと」であるとし、10年分の先行文献の調査に基づき、最も多い訪問国はアメリカ合衆国、ついでデンマークであり、「論文の主要キーワード」は頻度が高い順に「国際教育交流」「看護教育」「臨地実習／臨床・臨地実習／体験実習」「看護ケア」「異文化間看護」であると報告しているが、前出の問い（現状・意義・課題）に十分こたえているとは思えない。よって本稿では調査対象を看護学専攻の学部生に限定し、参加する研修についても、看護学専攻向けの、あるいは看護学専攻に限られなくとも看護学生を強く意識した研修に限定した上で、最新の報告も含めた文献をデータベース等を用いて精査し、海外短期研修についてどのような知見が公表されているか、特に、どのような取り組みが語学についてなされているか検討した。

## 2. 方法

報告者が医療・看護系の教員であるとは限らないため、全分野が検索対象となるCiNii（NII学術情報ナビゲータ）をデータベースとして選択した<sup>11)</sup>。古い論文の状況とは現在の看護系専攻の状況が異なると考えられるため、2000年以降の文献に限定した。各大学で必ずしも「短期」という語を用いていない可能性があるため、「短期」は検索語として用いず、フリーワードで検索語「看

「看護 海外 研修」を用いて「本文あり」の論文検索を実行した。検索結果は137件であった。この検索結果には、受け入れに関する報告、理学療法など他の専攻の学生を対象とする報告、看護師についての報告、その他無関係な報告が含まれたので、これらを論文タイトルとアブストラクトから判断して除外した。また、特に古い検索結果には看護専門学校や3年制の短期大学に関する文献が含まれるが、4年制のカリキュラムと時間的制約や課程全体での到達目標等も異なると考えられるので本稿では対象を4年制の大学学部の看護師養成課程に限ることとした。最終的に60件が検討対象となった。「研修」という語が用いられていない可能性があるため、「看護 海外 留学」という検索語でフリーワード検索（本文あり）したところ、14件の検索結果が得られた。上述の検索語「看護 海外 研修」を用いた検索と4件が重複して検索された。同様に絞り込んだところ7件は無関係であった。最終的に3件のみが検討対象となった。2組のフリーワード検索により、合わせて63件の文献を検討した。

本稿ではまた、CiNiiを用いた上記の文献検索がどの程度全国の看護学専攻の4年制課程での短期海外研修を反映しているか大まかに把握するため、日本看護系大学協議会の会員校（2019年度9月時点で283校）について各大学のウェブサイト内を検索して短期海外研修に関する情報を収集した<sup>12)</sup>。

### 3. 結果

データベース検索の結果を表1に示す。訪問先として言及されている文献数が多い国は、アメリカ17件、オーストラリア8件、韓国6件、タイ5件であった。最も多いタイプの文献は研修の報告と自記式質問紙による調査の報告であり、参加者（一部の文献では参加希望者）による主観的な判断の報告が多数見られ、そこでは参加者の満足度が高く、主観的な効果・有効性が繰り返し語られた。語学力に関しても主観的な報告がほとんどであり、客観的な指標を示した文献は中村ら（2008）1件のみであった（文献表45）<sup>13)</sup>。独自の質問紙以外では尺度の使用が見られた（文献表38）。また、紀要論文の占める割合が非常に大きく、紀要でない文献は63件中わずか6件しかなかった。

表1だけからも様々に工夫された様々な研修があることが分かる（例えば、文献表25のように「ナイチンゲールの足跡」を辿るものがある）。これ

らを分類するなら、三原（2017）（文献表13）が挙げる、【語学・異文化体験を目的とした短期海外研修】【専門的交流（保健福祉領域）を目的として短期海外研修】の2種類があるというより、これらの混合型が多くあることが明らかである（看護の専門分野にも異文化の要素があるため必ずしも截然と分けられない）。表1を瞥見すれば明らかなように、「グローバル人材」の重要な要素と考えられる「語学力」に焦点が当てられていない研修が少なくない。語学研修の性格を持つ研修でも必ずしも十分に英語学習の時間が確保されていないが、英語以外の語学は真剣な対象になっていない。英語で専門分野を学ぶことを意図した研修については、通訳に頼らなければ専門の内容理解内容が低くなるという指摘もなされていた（文献表57）。

効果としては、グローバル人材育成に関しては、国際的視野が広がる、異文化理解につながる、語学学習の動機づけになるという効果が複数報告され、看護学に関しても、看護観の明確化・深化、方向性の明確化、看護学に対する動機づけになっているという効果が指摘されていた。課題としては事前準備の不足、語学力（準備不足、現地での学びが制限される、向上しない能力もある）、過密日程などスケジュールリング、人的資源、経済的問題、カリキュラム上の制限、地域の人との交流がない、学生の受け身の態度が言及されていた。

各大学のウェブサイトの調査結果では、看護または医療分野を念頭に置いた海外研修があることが判明したのは、283大学のうち、本学を含めると188大学に上った（もともと医療系の学部しかない大学の研修を含む）。この数字には、看護または医療分野に特化した海外研修を提供していないが一般の海外研修に看護学専攻の学生が参加できる大学を含んでいないため、多くの大学で看護学専攻の学生が海外研修に参加できると言える。多数の学部から構成される大学では全学部共通のプログラムも膨大にあり、紙幅の都合上割愛せざるを得なかった。訪問先として多数の大学で言及されていた国や地域は、アメリカ82件、オーストラリア44件、イギリス33件、韓国・カナダ・タイがそれぞれ26件、中国・台湾がそれぞれ25件と続いた。大まかな傾向はCiNiiの検索結果（表1）と同様であった。研修期間は3日のみのものから長いものまでさまざまであった。参加費用は無論期間の長さにもよるが、10万円程度から60万円程度まで開きがあった。

表1 データベース検索の結果

「看護 海外 研修」による検索
書誌情報, 論文の性格・方法・内容・その他(訪問国はタイトルに明示されていない場合)
1.久保宣子,山野内靖子,蛭田由美:看護系大学生の国際看護活動に関する関心や期待—国際看護学教育の実態調査との比較からの考察—. 八戸学院大学紀要, (58), 163-171, 2019 自記式質問紙. 海外研修への関心と希望内容を聞いたのみ. 以前の論文とほぼ同じ内容
2.鳥越郁代,加藤法子,松井聡子,他 4 名:韓国、大邱韓医科大学校における韓方医学及び看護短期研修プログラムの開発. 福岡県立大学看護学研究紀要, (16), 111-119, 2019 漢方や韓国語を含む研修予定内容の紹介. 調整が遅れ実施できず
3.久保宣子,山野内靖子,蛭田由美:看護系大学生の国際看護活動に関する意識および教育ニーズに関する調査. 八戸学院大学紀要, (57), 151-161, 2018 自記式質問紙. 海外研修について関心と希望内容を聞く
4.加藤法子,鳥越郁代,吉村美奈子,他 5 名:本学学生の国際交流に関する意識調査. 福岡県立大学看護学研究紀要, (15), 73-82, 2018 自記式質問紙. 海外研修について関心と希望内容を聞く
5.平良美栄子,西上あゆみ,西内恭子:2017 年度国際看護学演習:ニュージーランドにおける海外研修報告. 梅花女子大学看護保健学部紀要,(8), 29-37, 2018 研修内容の報告. 自記式質問紙. おおむね肯定的評価. 事前予測より語学が難しいという回答少ない
6.成田有吾,竹内佐智恵,児玉豊彦,他 5 名:海外からの研修学生の来訪と本学からの派遣 2016 年後期から 2017 年前期までの展開:三重看護学誌, 20, 97-104, 2018 研修内容の報告. 「関係者全体の英語能力の向上, これまでの取り組みの経験知の活用と継承が課題」
7.樺澤三奈子,炭谷正太郎,渥美陽子,他 4 名:聖隷クリストファー大学看護学部における国際交流事業への取り組み:アメリカ看護研修に参加する学生の"activeness"をはぐくむ活動と課題 聖隷クリストファー大学看護学部紀要,(25), 11-18, 2017 参加者に対する質問紙. 事前英会話トレーニング増やす希望. 奨学金を受けられていない
8.清水佐智子,益満智美:韓国におけるホスピス緩和ケア研修報告 Seoul St. Mary's Hospital & Palliative Care Center 見学を通して. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 27(1), 87-92, 2017 研修内容の報告. 通訳あり. 語学授業なし
9.丸谷美紀,米増直美,児玉慎平,他 2 名. ボストン学生海外研修報告:健康格差解消に向けたローカル・グローバルな視座からの学び. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 27(1), 63-69, 2017 研修内容の報告. 数回の英語での事前学習. 事前学習・事後学習が課題
10.米増 直美,丸谷 美紀,児玉 慎平,他 2 名:公衆衛生看護管理論 I フィリピン研修報告. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 27(1), 55-61, 2017 研修内容の報告. 使用言語は英語. 語学に関する全体での取り組みなし. 英語力が課題
11.蛭田由美,久保宣子,山野内靖子:看護基礎教育における国際看護学の教育プログラムの開発に関する研究—わが国の大学看護学科における国際看護学教育の実態—. 八戸学院大学紀要, (54), 39-54, 2017 看護系大学に対する質問紙調査. 海外研修実施についても調査. アメリカ・タイ・イギリスの順で訪問多い
12.日高陵好:看護学生を対象とする海外短期研修の評価と成果. 人間と科学:県立広島大学保健福祉学部誌, 17(1), 95-106, 2017 自記式質問紙, 事前学習, 現地での英語授業あり. 【語学への意欲】【日豪看護の比較】【看護観への影響】【異文化体験】【海外志向】と学びを分類. どう継続するかが課題. オーストラリア
13.三原博光,日高陵好,國定美香,他 1 名:大学における短期海外研修を通じた国際交流の実践とその成果. 人間と科学:県立広島大学保健福祉学部誌, 17(1), 59-64, 2017 文献レビュー. 先行研究 10 件程度紹介. 選択基準不明
14.戸田登美子,丸光恵:海外研修前後における異文化間感受性の変化.甲南女子大学研究紀要.看護学・リハビリテーション学編,(12), 37-44, 2017 日本語版異文化感受性尺度を測定. 上昇した者と減少した者に分かれる. イギリス, ホームステイ
15.金井優子,横川裕美子:平成 28 年度看護学科における国際看護学Ⅱの海外研修(タイ王国)報告. 名桜大学紀要, (22), 107-110, 2017 研修内容の報告. 事前に英語とタイ語学習. 現地では語学授業なし. 過密日程(振り返りの時間の不足, 疲労)が課題, ホームステイ
16.久保宣子,山野内靖子,蛭田由美:文献から考察する看護基礎教育における国際看護学教育の現状. 八戸学院短期大学研究紀要, (42), 69-79, 2016 「国際看護」「教育」の 20 件の文献レビュー. 「海外体験(研修)は国際性を備えた看護職の育成のために効果的」

表1 データベース検索の結果 (つづき)

17.田代麻里江,巽彩香,藤田葉,他 1 名: 2015 年度国際看護学演習: 米国カリフォルニア州における海外看護研修報告. 梅花女子大学看護保健学部紀要, (6), 33-44, 2016 研修内容の報告. 学生による自己評価. 事前に 16.5 時間の英語授業. 現地での英語授業はなし. 満足度高い. ホームステイ実施できず
18.奥村真美: フィリピン貧困地域における「国際看護学演習」の学生の学びに関する一考察. 保健医療技術学部論集,(10), 93-104, 2016 自記式質問紙. 事前の英会話授業のみ. 【看護に対する考えの深まり】【異なる文化・価値観】【子どもにとっての遊びの重要性】【貧困地域における保健・医療の課題】の学び, 【看護の方向性の明確化】【看護を学ぶ姿勢の変化】【日本での生活に対する価値観の変化】の効果
19.枝川千鶴子,藤原紀世子,豊田ゆかり,他 1 名: 海外視察研修報告: サクラメント市における看護教育・小児医療. 愛媛県立医療技術大学紀要, 12(1), 59-64, 2015 研修内容の報告. 事前学習・研修内容に英語・英会話言及なし. アメリカ
20.谷野宏美: 新見公立大学カンボジア会 10 年間の活動報告. インターナショナル nursing care research 14(4), 135-141, 2015 実施状況と成果
21.白石知子,大橋裕子,今村恵子,他 2 名: 保健師学生のための異文化看護学習プログラムの検討 - ニュージランドにおける看護海外研修の視察より-. 生命健康科学研究所紀要, (11), 57-64, 2015 研修内容の報告. 保健師課程対象. 語学学校が拠点. 語学研修の比重高いが視察内容の記述が大部分
22.谷野宏美: わが国の看護学生を対象とした海外研修の動向. 新見公立大学紀要, 36, 85-87, 2015 10 年 44 件の文献レビュー. 先行文献から【人的資源の限界】【資金の乏しさ】【言葉の問題】【カリキュラム上の制限】【不十分な体制づくり】【環境的限界】という課題. 訪問先はアメリカ・デンマークが多い
23.阿部愛美,古俣亜沙子,関川ひとみ,他 6 名: 平成 24 年度保健学科国際保健学海外研修プログラム 『カナダ・ショートビジット 2013』学生研修レポート. 新潟大学保健学雑誌,11(1), 99-111, 2014 学生の英文レポート紹介.
24.田代麻里江,張 曉春: 2014 年度国際看護学演習におけるオーストラリア海外看護研修報告: 梅花女子大学オリジナル海外研修プログラム企画の試み. 梅花女子大学看護学部紀要, (5), 7-18, 2014 研修内容の報告. 4 年前期選択科目. 事前学習に 11 コマ英語・英会話. 現地では 1 コマ. 参加者募集・学生の事前の不安が課題. 質問紙で学生の満足度高い. ホームステイ
25.花井節子,山下美穂,福岡真理: 看護学科学生の海外研修の意義と課題: 2012 年度海外研修参加学生の学びから. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 18, 86-96, 2014 研修内容の報告. ニーズ調査. 学生のレポート. ナイチンゲールに関する学び, 看護観の明確化, 保健医療に関する国際的視野, 看護の本質の確認, 異文化理解が意義. 卒業直前で卒業後の効果確認できない, 次年度以降につながらない, 語学力不十分, 地域の人と交流がない, が課題. イギリス
26.横川裕美子,広本充恵,佐和田重信,他 1 名: 看護学科における第 1 回海外スタディ・ツアー報告: 名桜大学紀要, (19), 201-203, 2014 研修内容の報告. タイ語の事前学習のみ. 事前準備の時間確保が課題
27.張曉春,田代麻里江: 2013 年度国際看護学演習におけるオーストラリア海外看護研修報告. 梅花女子大学看護学部紀要, (5), 19-29, 2014 研修内容の報告. 4 年前期選択科目. 事前学習に 4 コマ英語・英会話. 現地では 1 コマ. 参加者の募集・金銭的援助が課題. ホームステイ
28.李孟蓉,角野善司,川田智美,他 2 名: 高崎健康福祉大学看護学科学生海外研修報告: インドネシア STIKES 大学との学生・学術交流協定(MOU)の成果として. 高崎健康福祉大学紀要, (12), 233-240, 2013 研修内容の報告. 自記式質問紙で満足度高い. 英語を使用. 事前の語学の準備について記載なし
29.安藤広子,野口恭子,千田睦美,他 5 名: 岩手県立大学看護学部における国際交流活動の展望. 岩手県立大学看護学部紀要, 15, 67-73, 2013 経緯・概要. 研修の認知度・関心・希望内容に関する自記式質問紙. ドイツ, アメリカ
30.船富奈々: ミシガン海外研修に参加して: 臨床教育看護師(プレ)としてのあり方をふり返る(特別寄稿). 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 10(1), 12-15, 2012 研修内容の報告. 学部生も同行したが詳細について記述なし. アメリカ
31.八代利香,松成裕子,李笑雨: 鹿児島大学学生海外研修支援事業の報告: 韓国の Chung-Ang University および保健診療所の訪問活動. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 22(1), 1-6, 2012 研修内容の報告. 4 年次後期 4 名. 現地での授業は英語. 学生の知識が不足. 語学力の向上が課題
32.西川まり子,横山ハツミ: 国際看護研修から見る異文化看護への挑戦: オーストラリア編. 広島国際大学看護学ジャーナル, 8(1), 71-79, 2011 研修内容の報告. 現地での英語授業あり. 異文化看護を著者が薦める. ホームステイ

表1 データベース検索の結果 (つづき)

33.馬橋和恵: アメリカの医療保障制度と看護事情: カリフォルニア海外研修を参考に. 上武大学看護学部紀要, 6(2), 53-56, 2011 視察内容の報告
34.香月毅史: 短期海外研修体験が看護学生の英語学習動機と学習意欲に及ぼす影響. 高崎健康福祉大学紀要, (10), 47-61, 2011 質問紙で英語学習動機と意欲の得点が上昇
35.柄本千鶴,永坂トシエ,福田由紀子,他 4 名: 平成 22 年度 海外研修報告--国際保健カナダ実習を実施して. 日本赤十字豊田看護大学紀要, 6(1), 71-76, 2011 研修内容の報告. 自記式質問紙で満足度高い. 7 名回答
36.川北直子,小笠原広実,遠藤恵美子,他 2 名: 看護大学生は海外体験から何を学ぶのか? 短期海外研修プログラムに参加した学生のラベルより. 宮崎県立看護大学研究紀要, 10(1), 38-49, 2010 異文化理解が焦点. 学生による自由記述. 期待された学びが得られていない. 学生が体験を過度に一般化するのが課題. タイ, 韓国
37.片岡由美子: 海外学生研修の実施の意義と参加者のコミュニケーション意識--平成 21 年度,愛知県立大学看護学部学生参加による研修の実施報告より.愛知県立大学看護学部紀要, 16, 49-57, 2010 自記式質問紙. 定員 10 名を超える応募から選抜. 現地での英語授業. 準備期間の短さ・学生の受け身の態度が課題. 学生が語学力向上を期待していない. アメリカ
38.香月毅史,荒井淑子: 看護学生の短期海外研修における英語学習に関する意識調査. 上武大学看護学部紀要, 5(1), 12-18, 2009 自記式質問紙(英語学習動機尺度(近藤 2006). 英語のスキル認知, コストの認知尺度(塩谷 1995). 独自のアンケート), 12 人を対象. 英語学習動機では研修前後で有意差なし. スキル認知のスコアが有意に低下(学習方法の理解が深まった). アメリカ
39.佐山理絵,高木廣文: 看護教育における海外研修の位置づけ 国際看護の視点から(3)タイ,ラオス専門教育のなかの海外研修. 国際看護学実習. 看護教育, 50(3), 256-259, 2009 研修内容の報告. 卒研・実習の 4 年生が参加. 実習の使用言語は英語. 語学力で学びが制限されるのが課題
40.桜井礼子: 看護教育における海外研修の位置づけ 国際看護の視点から(2)韓国ソウル大学校との相互交流研修および国際看護学教育. 看護教育, 50(2), 164-167, 2009 研修内容の報告. 日常会話程度の英語力を選抜要件. 関連科目・国際看護学が英語で行われる. 方向付けが課題
41.横山京子: 看護教育における海外研修の位置づけ 国際看護の視点から(新連載・1)米国シアトル・パシフィック大学における短期海外研修. 看護教育, 50(1), 70-74, 2009 研修内容の報告. 大学隣接の語学学校を利用. 参加者少なく隔年開催. 費用・単位化が課題. ホームステイ
42.丹野かほる, 瀬倉幸子: ラオス国際看護学研修の学習成果と効果的な海外研修のあり方の検討. 日本看護学会論文集 看護教育, 40, 269-271, 2009 7 名に面接. 国際看護の学びを得ている
43.吉田翠,沢禮子,石川紀子: 天使大学の海外研修における学び--第 6 回(2006 年度)天使大学海外研修を一事例として. 天使大学紀要, 9, 121-136, 2009 研修内容の報告. 7 名に質問紙で語学・専門分野の主観的成果を尋ねる. 非常利教育団体が受け入れ. ホームステイ. 語学研修. 学生には英語講師から個人面接による語学の評価. 単位化が課題. アメリカ
44.荒井淑子,渡邊竹美,香月毅史: 平成 20 年度海外研修報告: 第 2 回看護学部学生海外研修を実施して. 上武大学看護学部紀要, (4), 41-46, 2008 研修内容の報告. 自記式質問紙で満足度高い. 語学に関する記述なし. アメリカ
45.中村博生,山本淳子: 看護職及び看護学生の英語コミュニケーション能力育成に関する研修プログラム開発(2): 海外研修プログラム. 看護研究交流センター年報, (19), 11-12, 2008 研修前後のリスニング・スピーキング能力測定. 有意に改善. 流暢さ・発音の正確さ・文法・読解は改善せず課題
46.小池武嗣,渡邊竹美,赤松弥生,他 1 名: 平成 19 年度海外研修報告(1): 第 1 回看護学部学生海外研修を実施して. 上武大学看護学部紀要, (3), 37-40, 2008 自記式質問紙. 感想を引用. おおむね満足. 語学に関する記述なし
47.香月毅史,渡邊竹美,赤松弥生,他 1 名: 平成 19 年度海外研修報告(2): 米国における高齢者施設の運営システムと特色. 上武大学看護学部紀要, (3), 41-47, 2008 研修内容の報告. 教員の主観による学生の様子の記述のみ
48.赤松弥生,渡邊竹美,香月毅史,他 1 名: 平成 19 年度海外研修報告(3): Children's Hospital & Regional Medical Center における学び. 上武大学看護学部紀要, (3), 49-55, 2008 研修内容の報告. 自記式質問紙で興味を持てた. 学生のレポート内容紹介. 語学に関する記述なし. アメリカ
49.勝井伸子,守本とも子,Phanida Juntasopeepun: チェンマイ大学看護学部海外研修報告. 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要, 4, 63-70, 2008 研修内容の報告. 質問紙による満足度調査. 事前に 5 回英語で授業. 研修時期・配当学年に不満

表1 データベース検索の結果 (つづき)

50.大賀明子,坂梨薫,永井祥子,他 1 名: 母性看護学における海外フィールドワーク研修--事後レポートに見る学生の学び. 横浜看護学雑誌, 1(1), 98-103, 2008 研修内容の報告. 語学に関する記述なし. レポートから学生の学び
51.石井美里,溝口満子,佐藤幹代,他 2 名: 米国メイヨー・メディカルセンター短期留学における学生の体験と学び. 東海大学健康科学部紀要, (13), 19-28, 2007 研修内容の報告. 自記式質問紙とレポートによる主観的評価. 3 年分の分析. 最終年は事前に 4 日(21 時間)の語学研修. 日米の医療についてなど事前学習が不足
52.片岡由美子: 学生海外研修の概要とその課題--平成 17 年度,愛知県立看護大学生参加による研修の実施報告. 愛知県立看護大学紀要, 12, 59-66, 2006 自記式質問紙. 現地での英語授業. 英語力向上・学びについて主観的報告
53.濱畑章子,片岡由美子,米田雅彦,他 4 名: 資料 看護学生の国際交流に関する意識調査. 愛知県立看護大学紀要, 10, 27-32, 2004 国際交流に関する自記式質問紙. 研修については関心と希望内容を調査
54.中嶋律子,森雅美,河合洋子: 平成 15 年度シドニー大学看護学部学生研修に関する報告. 名古屋市立大学看護学部紀要, 5, 35-42, 2004 研修内容の報告. 質問紙. プレゼン. 通訳あり. 語学に関する記述ほとんどなし. 英語の講義を受ける. 英会話の希望. 期間を長くしてほしい
55.田浦秀幸: 海外短期看護研修の及ぼす心的効果に関する考察. 福井大学医学部研究雑誌, 4(1・2), 87-97, 2003-12 先行研究から「海外滞在経験による自信の移り変わり」「異文化と外国語への意識」の質問紙. 研修については関心と希望内容を調査. 平日午前に英語授業. ホームステイ. オーストラリア
56.河合洋子,森雅美: シドニー大学看護学部での本学〔名古屋市立大学看護学部〕学生の研修--平成 14 年度研修の事前準備と実態. 名古屋市立大学看護学部紀要, 4, 31-40, 2003 研修の事前準備の内容の報告. 事前に日本語論文に基づく英語プレゼンを課す. 現地学生の授業に参加して看護学習への動機づけとなったと著者による評価
57.石田陽子,荒木暁子: 学生の海外研修プログラムの成果について--ノースカロライナ大学ウィルミントン校看護学部研修を振り返る. 岩手県立大学看護学部紀要, 3, 141-146, 2001 研修内容の報告. 研修後に質問紙調査. 英語自体の授業はないが現地の学生とペアで授業に参加. 語学力に限界. 通訳が必要
58.今村桃子, 齊藤博美: 米国海外研修の実施状況と効果. 聖マリア学院紀要, 15, 91-93, 2000 研修後の質問紙調査でおおむね肯定的評価. 学生の 3 割が参加. 21-51 名. 語学に関する記述なし
59.中村勝: 平成 12 年度「第 4 回ベトナム・チョーライ病院国際ボランティア活動」の概況と所見. 国際医療福祉大学紀要 5, 53-62, 2000 研修内容の報告. 語学の事前準備・現地授業なし. ボランティアが含まれる
60.岡光基子,瀧野由夏,斉藤ひさ子,他 2 名: 海外報告 サモアにおける地域保健活動について. 山口県立大学看護学部紀要, (4), 88-93, 2000 研修内容の報告. 学生の様子に関する記述は少ない. 英語でプレゼン
「看護 海外 留学」による検索
61.井川由貴,長坂香織: 看護学部生の異文化受容に関する現状と課題～A 県立大学看護学部のグローバル化推進に向けた教育への一考察～. 山梨県立大学看護学部研究ジャーナル, (5), 13-28, 2019 自記式質問紙. 学生の関心・異文化体験・国際看護とは何かを尋ねる. 環境整備, ニーズに合わせた科目配置イメージできるようにする工夫が課題
62.麻原きよみ,ハフマン ジェフリー,井上麻未,他 7 名: 聖路加国際大学海外留学プログラムの特徴と成果: 学生の学びと成長に焦点をあてて. 聖路加国際大学紀要, 4, 18-23, 2018 自記式質問紙. 「言語能力の向上」「看護, 文化, 社会, 保健医療システムに関する学習」「姿勢とアイデンティティの形成」に関する学び
63.小澤杏奈,藤岡好美,結城美穂: 海外実習において看護学生が学んだサモアの文化と看護の特徴. 長野県看護大学紀要, 7, 21-30, 2005 語学の事前準備・現地授業なし. 英語力が課題

#### 4. 考察

##### 4.1 語学研修としての側面

語学力について客観的な指標を用いた報告は 1 件しかないが, そこではスピーキング能力とリスニング能力の向上が報告されている. 10 名のみのデータであることに注意が必要であるが, これまで看護学専攻以外の分野では短期間でも語学力の向上が繰り返し報告されており<sup>15-16)</sup>, 看護学専

攻を対象にした短期海外研修でも同様の結果が得られたと言える. 質問紙による主観的な評価を用いた調査もあるが, それらでも語学力が向上したとする参加者が少なくない. これは本学(石川県立看護大学)の参加者の状況を見ても妥当であるように思われる. 短期間の研修での語学力向上に懐疑的な声は, おそらく, 外国語の習得に必要な時間に比して短期の研修で語学に充てられる時間

が非常に小さいことや上級者は短期間で語学力向上を実感しにくいことを念頭に置いていると思われる。言語習得に必要な時間として良く知られたものに、アメリカ合衆国国務省（Department of State）外交官養成局（The Foreign Service Institute：FSI）が職員の外国語教育に用いる外国語の分類がある<sup>17)</sup>。その分類において日本語は“Category IV—Super-hard languages”という最も難しい言語のグループに分類されている。このグループは一般的な熟達度に到達するために88週（2,200時間）の研修が必要であるとされている。こうした語学習得に必要な学習時間は、言語間の言語学的・音声学的距離に依存しているため、日本人学習者が英語を学習する際にもおおよそ同程度の時間が必要だと考えられている。ただし、日本語は音声学的に世界で最も単純化された言語であるため、日本語の母語話者が英語を学習する際にはさらなる困難が伴う。加えて、FSIによる数字はモチベーションが高く、職務として学習に専念することが可能な所謂エリートに対し、その時点で最も効果的と考えられる学習法を用いて行われることから、一般的な日本人学習者にはFSIが示す以上の学習時間が必要であるという見解もある。こうした数字の前に数週間の外国滞在はほとんど無力に思われるが、それでも学習時間を積み上げられることには変わりない。無論、短期海外研修の前後で語学力の向上が見られたからと言って、それは必ずしも短期海外研修が語学力の向上のために推奨されることを意味しない。というのは、同様の学習効果は、例えば同じコスト、あるいは時間の他の内容（語学の授業、試験対策講座の受講）などによっても得られたかもしれないからである。しかしながら、看護学部の場合、海外研修の間でもなければまとまった語学学習の機会を確保できないと考えられるため、実際に語学力の向上が見られるのであれば看護学専攻の学生にとってこそ語学力向上のために推奨されると言えるかもしれない。普段語学に時間を割くことの少ない看護学生でなく、すでに語学に多くの時間を費やした語学力の非常に高い学生であれば、短期間に有意な上昇を得ることは困難である。実際、今回の文献の中にも、「回答者のうち、元来高い英語コミュニケーション能力を持っていると自己認識していた学生の回答は「変わらない」にとどまった。」という指摘があった<sup>18)</sup>。また、「成績下位のグループが上位グループよりも伸びていることが、いくつかの調査で報告されている。」

という報告もある<sup>19)</sup>。こうしたことを考慮すると、（普段語学学習に時間を割きにくい）看護学専攻であるからこそ、客観的な指標で語学力の向上を示せる可能性、すなわち、短期海外研修の語学に関する効果を実証できる可能性があると考えられる。

#### 4.2 語学と専門の組み合わせについて

現代においては語学を学ぶことだけに限れば、特段海外に行く必要性はないし、これは初級・中級者により当てはまるであろう。しかしながら、看護の専門の内容と組み合わせることで学生は有益な学びを得ているようである。ただし、表1の文献の中でも指摘されている通り（文献表25, 39, 57）、語学力が不十分であれば視察先で見聞する内容が理解できず、ただの観光になってしまうリスクがある（それを参加学生が問題であると考えなければ、学生のアンケートの結果は相変わらず満足度の高いままになると思われる）。開き直って語学をあきらめて通訳をつけているところはこうした危惧が減るだろう。語学力が不十分であっても、専門の内容がわかっていれば内容が理解できることもあるが、下級生での参加では英語がわかっても専門の内容がわからないという状態が生じうる。実習先・視察先の内容に従って、語学力の要求水準・事前準備、配当学年等を個別に検討するのが現実的な対応であると考えられる。

#### 4.3 参加学生による主観的評価が行われているが研修の有用性は繰り返し示される

文献の中ではこれまで繰り返し、看護学専攻の学生を対象とした短期海外研修の有効性は示されてきていると言える。ただし、上述した通り、多くの大学での実施状況は報告されていないので、より多くのプログラムについて報告されることが短期海外研修の有用性を示すためには望ましい。また、その際、評価の方法に留意する必要がある。学生が回答する授業アンケートは、とりわけ実習系科目についてはスコアが高くあまり参考にならないと考えられ、一般的に留学に対する満足度も高いことが報告されている<sup>14)</sup>。また、研修前に学生の希望やニーズの調査が頻繁に行われているが（文献表1, 3, 4, 29, 53, 55, 61）、事前に学生自身がニーズを客観的に把握しているとは限らないため、研修後一定期間経過後また就職後の調査がさらに必要である。



#### 4.4 十分な報告が存在していない

表1と各大学のウェブサイトの調査結果とを照らし合わせると、ごく一部の研修のみが文献検索のデータベース上で扱われていることがわかる。そしてこの印象は、表1で検討対象となった63件のうちに同一の大学の報告をするものが少ないことで強まる。3件以上の報告がある大学をまとめると、上武大学6件、愛知県立大学（2009年度から愛知県立看護大学が愛知県立大学看護学部となったため愛知県立看護大学時代の報告を含む）5件、鹿児島大学4件、梅花女子大学4件、名古屋市立大学3件、八戸学院大学3件となった。これらを除くと、文献データベースに載せられたものは一部でしかないとわかる。こうした状況は、2002年の時点ですでに半数の看護系大学で海外研修が実施されているという報告があることを考慮すると、最近始まったことではないと考えられる。さらに詳細にみると、プログラム開始初期の報告が多く、回数を重ねた、より洗練された実施形態についての報告が上がってきていない。例えば、文献表12, 26, 46, 47, 56, 57はそれぞれ初回、21, 44, 55は第2回の研修についての報告である。継続的な改善についての情報は得にくい現状がある。加えて、文献で検索される報告の偏りも明らかである。例えば、各大学のウェブサイトの調査では中国の訪問が25件見られるが、表1の検索結果での報告は皆無である。このような状況は、各大学がそれぞれ工夫しながら短期海外研修を実施しているものの、情報の共有等が不十分なのではないかという疑念を抱かせる。研修に関する情報の共有を進めることが看護系の短期海外研修の改善につながる可能性がある。

#### 5. 結論

データベース検索からは、語学と専門の様々な組み合わせが見られた。文献は研修内容の報告と自記式質問紙による調査の報告がほとんどであり、参加者（一部の文献では参加希望者）による主観的な判断の報告が多数見られた。語学力に関しても主観的な報告がほとんどであり、客観的な指標を示した文献は1件のみであった。しかしながら、データベースで検索される文献の範囲内では短期海外研修の有効性は繰り返し示されていること、ただし、参加学生の主観に基づく評価が多くの場合行われていること、語学研修としての側面は客観的には十分調べられていないことが明らか

になった。こうした文献で扱われるのは研修全体の一部であって十分な報告が存在していると言えない。各大学で行われているより多くのプログラムの間の情報の共有は十分に行われるなら、内容の検討、評価、フォローアップ等、看護系の短期海外研修の改善に寄与する可能性がある。上述した通り、短期ではなく長期の海外滞在を推進する動きが省庁にあるが、これは機会コストを無視した議論であり、学生にとって海外滞在にはデメリットもあるが海外研修が短期であることによってそのデメリットを緩和できる面がある。語学力向上に関しては看護系専攻であるからこそ短期研修の恩恵を受けやすいという可能性も示唆されている。

本稿はオンラインで公開されている情報しか用いていないが、それでも情報が膨大であり、多くの情報を割愛せざるを得なかった。

#### 利益相反

利益相反なし

#### 引用文献

- 1) 神田啓晴, 長江優子: 日本, 実は世界4位の「移民大国」採用難で門戸開放, 日本経済新聞 2019年8月20日. <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO48702850Z10C19A8000000/> (accessed 2019/9/10)
- 2) 日本政府観光局: 月別・年別統計データ (訪日外国人・出国日本人). [https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor\\_trends/](https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/) (accessed 2019/9/10)
- 3) 首相官邸: 新成長戦略 ～「元気な日本」復活のシナリオ～ (平成22年6月18日)閣議決定. <https://www.kantei.go.jp/jp/sinseichousenryaku/sinseichou01.pdf> (accessed 2019/9/10)
- 4) Selanders L: Florence Nightingale British Nurse, Statistician, and Social Reformer. <https://www.britannica.com/biography/Florence-Nightingale> (accessed 2019/9/10)
- 5) 太田浩: 日本人学生の内向き志向に関する一考察－現在のデータによる国際指向性再考－. 留学交流2014年7月Vol. 40. [https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/\\_icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201407otahiroshi.pdf](https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201407otahiroshi.pdf) (accessed 2019/9/10)
- 6) 総務省: グローバル人材育成の推進に関する政策評価<結果に基づく勧告>. [http://www.soumu.go.jp/menu\\_news/s-news/107317\\_00009.html](http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/107317_00009.html) (accessed 2019/9/10)

- 7) 楽天株式会社：よくある質問. <https://corp.rakuten.co.jp/careers/graduates/faq/> (accessed 2019/9/10)
- 8) 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会：上場企業における英語活用実態調査 2013年報告書. [https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official\\_data/lr/katsuyo\\_2013/pdf/katsuyo\\_2013.pdf](https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official_data/lr/katsuyo_2013/pdf/katsuyo_2013.pdf) (accessed 2019/9/10)
- 9) 三原博光, 日高陵好, 國定美香, 金井秀作：大学における短期海外研修を通じた国際交流の実践とその成果. 人間と科学：県立広島大学保健福祉学部誌, 17(1), 59-64, 2017-03.
- 10) 谷野宏美：わが国の看護学生を対象とした海外研修の動向. 新見公立大学紀要, 36, 85-87, 2015.
- 11) 国立情報学研究所：CiNii. <https://cinii.ac.jp/> (accessed 2019/9/10)
- 12) 一般社団法人日本看護系大学協議会：会員校 <http://www.janpu.or.jp/outline/member/>
- 13) 中村博生, 山本淳子：看護職及び看護学生の英語コミュニケーション能力育成に関する研修プログラム開発(2)：海外研修プログラム. 看護研究交流センター年報, (19), 11-12, 2008.
- 14) 河合塾：日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究 成果報告書(2018年5月). [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/\\_\\_\\_icsFiles/fieldfile/2018/11/22/1411310\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/___icsFiles/fieldfile/2018/11/22/1411310_1.pdf) (accessed 2019/9/10)
- 15) 大津理香, 佐竹正夫：短期海外語学研修はどれほどの効果があるのか. 留学交流 2016年8月5日. <https://www.jasso.go.jp> > 2016/08/05 > 201608otsusatake (accessed 2019/9/10)
- 16) 鈴木理恵, 林千賀：海外語学短期留学の効果 学生の言語的・情意的側面に見られる変化. 関東甲信越英語教育学会誌, 31(0), 15-28, 2017.
- 17) Department of State: Foreign Language Proficiency Has Improved, but Efforts to Reduce Gaps Need Evaluation. Report to Congressional Requesters. <https://www.gao.gov/assets/690/683533.pdf> (accessed 2019/9/10)
- 18) 佐竹正夫：短期海外語学研修の効果, 世界経済評論 IMPACT 2016年8月22日. <http://www.world-economic-review.jp/impact/article695.htm> (accessed 2019/9/10)
- 19) 片岡由美子：学生海外研修の概要とその課題--平成17年度愛知県立看護大学生参加による研修の実施報告. 愛知県立看護大学紀要, 12, 59-66, 2006.

## The Current Situation and Challenges of Short-term Study Overseas Training Programs at Faculties of Nursing

Yutaka KATO

### Abstract

Today, many universities implement programs that allow students to study abroad for a short term. This study reviewed literature on short-term overseas training programs at nursing faculties to grasp the current situation and the challenges of these programs. The CiNii database provided by the National Institute of Informatics was used and the literature search was conducted using two sets of search words. The results were tailored according to predetermined criteria. In total 63 articles were analyzed. Simultaneously, official websites of nursing faculties across the country were searched for information on short-term programs for purposes of comparison. The majority of the search results assessed the effects of programs using subjective measures such as self-administered questionnaires. Assessments of language proficiency improvements were also subjective with only one exception. The searches revealed that reports on short-term overseas training programs primarily intended for nursing students are lacking and that the effectiveness of programs have been repeatedly demonstrated but mostly based on subjective assessment measures.

**Keywords** overseas training program, short-term program, international nursing, foreign language